

エイズレポート

—文科系大学でのエイズ教育について—

清水 潔

要 約

愛知県立大学で1-2年生207名に「エイズ教育について私はこう考える」というテーマでレポートを課しそれを分析した。今の大学生はエイズ教育を中学・高校の保健体育の授業を中心に受けてきており、それがエイズの基礎的な知識の獲得に役立っている。しかし学生はエイズを身近に感じる事が出来ずに授業法への工夫が求められている。エイズを教える教師の自信のなさや大人のエイズへの無理解についても専門家教育や大人への生涯教育など注文が多い。今回は薬害エイズについて触れたレポートが減少した。学生へのマスコミの影響は大きい。エイズに関するセンセーショナルな報道は減った現在、小中高校とともに大学でのエイズ教育も、最新の知識、国際的な視点、人権教育などさらに工夫する必要性について触れた。

はじめに

私は平成9年3月「エイズレポート—文科系大学でのエイズ教育をしてみても—」を書いた。¹⁾その中で大学生のレポート「エイズについてこう考える」264件を分析し、1)現在の小中高校のエイズ教育はエイズに関する初歩的な知識の普及に役に立っている。2)平成8年度のレポートでは薬害エイズに関するレポートが多くマスメディアの影響が大きい。3)大学生にとってエイズを身近な問題として受けとめていない。4)薬害エイズがクローズアップする中で薬害エイズ以外のエイズ患者を自業自得にする意見がかなり見られるなどを骨子として述べた。

平成10年度はさらに焦点をエイズ教育にしぼり「エイズ教育について私はこう考える」というテーマでレポートを提出してもらいその内容を私なりに整理し現在の大

学生が受けてきたエイズ教育について考察した。

対 象

対象は愛知県立大学で保健体育、健康科学を受講した207名の学生で「エイズ教育について私はこう考える」というテーマで自由にレポートを書いてもらった。学生は文学部、外国語学部、情報科学部の学生1-2年生で男子25名女子182名と女子大生が多い。一部に社会人で入学した学生のレポートも入っている。

レポート内容全体の分析

レポートはエイズ教育について自由に書いてもらっている。内容は様々で同じ内容が重複する場が多いが、あえて学生がレポートの中で一番主張したかった点を一項目に絞ってみると以下ようになる。

- エイズ教育のあり方はどのようなべきか。75件
(偏見・差別の問題、授業法、エイズ教育を始める時期、薬害エイズの反省などを含む)
- 自分が学校で受けてきたエイズ教育の評価 56件
- 性教育に焦点を絞ったレポート 38件
- エイズ教育に及ぼすマスコミの影響 29件
- その他(インターネットとエイズ、死の教育 9件
の必要性、薬物使用とエイズ、留学経験など)

以下、レポートの中から著者が印象に残って言葉をそのまま記載する。「」内は学生の言葉である。

1. 今の大学生は子供の時にエイズについてどのような経験をしているか。

日本のエイズは1980年代のセンセーショナルなエイズ報道があり、それが子供の世界にも濃厚に反映された。小学校時代の体験に触れているレポートが5件あった。

いじめとの関係でいまだに忘れられないようである。

「私が小学校の頃、こんな出来事があった。アレルギーか何かで体中に、できものができた子がいた。ちょうどその頃、子供達が覚えたてで、その内容をよく知らない病名があった。エイズである。みんなはその子を口々にエイズ、エイズとはやして、触るとうつる、あっちへ行け！などと言ってからかっていた」「まだ子供達の意識の中で絶望的な重病といえば、エイズとガンだった。ガンは種類によっては克服できるし、体内をそれで亡くした人もいて、普段の話題にのぼることもなく、重病として神妙に扱われていた。一方でエイズは違った。エイズはどこか薄暗く、汚らしいところのあるイメージで扱われた。子供同士のいじめやケンカの時に使う悪口の語彙にも入っていた」。

2. 今の大学生はいつ頃からエイズ教育を受けているのか。

自分がいつ頃エイズ教育を受けたかハッキリ記載したレポートが46件あった。中学校からが38件で一番多い。高校からが5件で小学校と記載した例が3件あった。

「私がエイズに関する授業を受けたのは中学生の頃だったと思う」「エイズについて初めて教育されたのは、小学校6年のときだった。その時は理解をするというよりも、教科書を読み、必要単語を覚えてテストに備えるのがせいぜいだった。中学に上がると、OHPを使ってより詳しい授業を学んだ」「小学校の頃にはエイズについての授業はなかった。正規のエイズの授業が始まったのは、中学校の保健からである」「現在エイズについて強制的に勉強をさせられるのは中学校・高校の保健体育の授業である」。

レポートを書くために名古屋周辺の小学校・中学校の養護の先生を取材した学生がいる。現在は小学校からエイズ教育に取り組んでいる。

「名古屋市の小学校では、学習指導要領に乗っ取って、目標を達成する為に、校内で話し合っ、学校独自で何を教えるか決める。養護の先生の考え方も学校によって違うので、学校によって、性教育・エイズ・環境教育を、教えたり教えなかったりする学校が出てくる」「瀬戸市では性教育推進協議会でカリキュラムを組んで小学校から中学校まで教える。小学校では1年に2時間エイズ教育の時間を持つ。1年生では、血液は自分で始末しましょう。誰でも人間は平等などを教え6年生になると、性教育をする。中学校では、保健体育に時間にエイズのビデオを見たりする」「尾

張旭市立の小学校では文部省からエイズ指導があり、5年前から1-6年生に性教育をするカリキュラムの中にエイズ教育を取り入れている。6年生では1年間に2時間エイズの話し、患者さんへの思いやり、共に生活する時はどう接するか。自分だったらどう接して欲しいか。ジョナさんやライオン君のビデオを見たり、本を読んだりする。アンケートを取ったりする」。

3. それではどのような科目でエイズ教育を受けているのか。

どのような科目でエイズ教育を受けたかに触れたレポートは31件あるが、27件が保健体育である。理科の生物、社会科、家庭科、年一回の人権講話、特別授業などの記載もある。

「わたしが中学・高校のころうけたのはほとんど保健体育の授業だった。ビデオなどをみて、そのあと感想文をかいたり、討論などをした。今でも覚えているビデオはNHKのドキュメンタリーで、アメリカの親子で両親がエイズで母子感染した子どもの生活をレポートしたものと、日本の川田龍平さんの裁判の記録をまとめたものである」「学校でエイズ教育にあてられる時間は、絶対的に少ないと思う。保健体育で2、3時間やっただけでエイズのすべてを知ることにはできない。だったら、エイズは保健体育の授業でやるもの、という概念を捨てて、例えば、人権問題であれば社会科で扱えるものであるし、特別授業を設けてみるのもいい方法だろう」「私だけではなく、今の学生のほとんどは保健体育という科目にそんなに興味を持っていないように思う。これは主要5科目に重点を置いているために他の科目にあまり注意を向けられないという理由もあるかもしれない」「このレポートを作成するにあたって、私は高校の時の教科書を調べてみた。もちろん初めは保健体育の教科書を引っ張り出してきたのであるが、まさかと思って試しに開いてみた生物の教科書にまでAIDSの説明が載せられていたのには驚いた。これは遺伝子に関する項目のページで、免疫機構が破壊されることについてを中心とした内容であったが、日本でもこのように様々な分野からAIDS教育をすすめているのだなとすばらしく思った。他に、もうすでにされているかもしれないが、国語の教科書でもAIDS患者の方々やその家族の皆さんの書かれた手記などを取り入れたみてはどうかと思う。AIDS問題に限らず、現代は学歴社会で、受験科目以外にはあまり力を入れて学べなくなる、そんな方法をとれば少しは効果が上がるかもしれない」。

4. 本来中学校・高校でエイズ教育が行われているはずなのにそれが身についているかどうかは別問題である。以下のようなレポートもあった。

「小中高校と12年間多くのことを学んできたが、エイズについてはほとんど先生からちゃんと教えてもらった覚えがない。マスコミ等でおおまかなことを知っているだけだった」「レポートを書くために本を読んだが、本を読んで初めてエイズについて詳しいことを知った」「私が初めてエイズについて知ったのは実話を元にした漫画を読んだ時だった」「エイズ教育を受けたことがありますか？と聞かれたら、私はどうやって答えたらいいのかわからない。今の日本でのエイズ教育は、とても曖昧なものでしかないように思う。実際に私自身は高校生の時にエイズに関するパンフレットやプリントをもらった事だけしか覚えていない」。

5. それでは今の大学生は受けてきたエイズ教育にどのような印象を持っているのでしょうか。受けて来たエイズ教育を評価する意見と不十分とする意見とむしろ否定的な意見がある。

評価する意見としては「僕も、中学・高校と保健の授業を受けてきましたが、エイズに関する問題を取り上げられていたことはよく覚えています。十代、二十代の若い世代は、エイズに対する基本的な知識をもつようになったと思います」「受験のための勉強を教え込むよりも、エイズなどの社会問題について教えることの方が現在の私たち人間にとっては重要なことだと思う」「ある特定の病気をとりあげて、それに関して教育が行われるのは珍しい。風邪ではそんな教育はないし、小学校では虫歯に関する授業ぐらいである」

今のエイズ教育では不十分あるいはよくないという意見は以下のようなものである。基礎的知識が十分に教えられていないという不満が一つはある。

「学校での教え方は何となく形式的な感じがするということである。特に感染の原因については、学校だとダイレクトな表現を避けているようだ」「確かに我々は、中学校・高校の保健体育の授業でエイズについて習ったし、上の世代の人達よりは、それについて詳しいと思う。しかし、私達が学校で教えられた内容が、その目的を十分に果たしているだろうか。我々はエイズに対する正しい知識を持っているのか。何故性交渉によってエイズに感染するのか、何故同性愛者に感染者が多いのか、どうすれば自分がHIV保有者なのか、そうでないのかが判るか、そういう基礎的な知識は何も教えてもらえなかったように思う」「病気で苦しん

でいる人のつらさなど、少しも頭にはない。AIDS教育までもが、詰め込み式だったことに原因があると思う」。

今のエイズ教育がエイズの予防方法に重点を置かれるため差別、偏見に結びつく危険性を指摘しているレポートは多く、以下の様である。これは日本のエイズ教育がまだ克服出来ない問題を突きつけている。

「予防方法に偏り過ぎていて、感染者たちの人権や彼らに対する偏見や差別の問題について見落としがちである」「しかし、エイズという病気そのものについて理解させ、感染予防について教えるだけでは、エイズに対する恐怖が募るばかりである。その結果、感染者に対して不必要に防衛的になり、感染者の人権を侵害することになってしまう」「エイズの人と一緒に遊んだり、手をつないだりしてもうつらないよといわれるのも逆に、感染している子供はどこか普通とは違っているのだ、という目を持つことになるかもしれない。私はエイズ教育の難しい所は今述べた点にあると思う。つまり、エイズ教育は感染者に対する差別意識を除去するように働いていよう、実は社会にはエイズウイルスを持っている人がいてその人たちは普通の人と違っていているのですよ、と生徒に教え、これまでなかって差別意識を新たに植え付ける方向に働いているように思われるのだ」「エイズでこわい病気なんだ、自分も何かで感染したらどうしようという印象が強く残っていた。こういう印象をもったのは私だけではないはずである。今思えば、こういう印象がエイズ患者に対する偏見の芽になった。当時のエイズ教育は本当に正しかったのか」「今のAIDS教育は、病気については教えて病気になった人のことについては教えていない」「エイズについては世の中にはかわいそうな人々がいる。治らない病気で死んでしまうのだよ。このかわいそうな人々を差別してはいけないよという具合に第三者的にしか捉えておらず、かつ既に差別意識を植えつけていたように思う」「さながら障害者に対していづく複雑な本音とタテマエのようなものを感じた」。

6. エイズを身近に感じる事が出来ない、それを危惧する学生が多い。33人の学生が実感のなさに触れている。その為にエイズ教育の必要性に疑問を持つ学生もいる。

「感染に対する行動パターンなどの説明は、個人的にエイズにうつらない教育であって、健常者の立場からのみの視点である。感染者や患者への差別意識や偏見をもたないという第三者的立場ではなくても、もし自分が感染したらという立場から、真剣に考えさせる

ような教育が求められると思う」「本当に頭のなかだけの知識であった」「エイズに関しては、主に、その病気の特徴、感染経路が中心となり、正しい知識や情報を教えられた。しかし、それだけのものであり、実際の社会問題には全くふれたりもしない。正しい知識の普及は喜ぶべきことではあるが、これだけでは、他人事であり、自分自身の問題として、エイズを考えることはできません」「エイズはまだ日本では名前だけが先走りして、実際の対処法や、基本的な知識はあまり理解されていないもののように感じる。結局自分とは遠いものである。ドラマや映画の中のもの、と思われているのではないか」「エイズ教育の功績である国民のエイズに対する意識の向上も、エイズの本質的な恐ろしさに対する実感のなさの為に無実化している所にあるのではなからうか」「私は、正直に言って、エイズはあまり自分に関係のない病気だと思っています。だってふつうに生活していれば移らない病気なんですから。セックスだって不特定多数とするほどひまじゃないし、経済的にも子供を育てられる状況にないから避妊もします」「まずエイズを身近なものだと感じること。すべてそこからだと、私は思う」。

7. 今回はエイズ教育について私はこう考えるというテーマでレポートを課しているので授業法についての工夫や注文が多かった。いくつか取り上げる。

授業法への工夫については「高校生、大学生には正しい知識をもたせると同時に、例えばコンドームを配布して正しい使用方法を教えるというような具体的な教育も必要となってくると思う」「一つは参加型の授業にすれば少しは改善されるのではと思う。つまり教員側が一つのテーマを出し、我々が意見を出し合って話し合いをするという形式のことだ」「患者が前向きに生きている姿をビデオ教材で使用するのが最も望ましいのではないか」。

授業内容への注文としては「エイズ教育には、単にエイズの知識を与えることだけではなく、そういった精神的な支えになれるような人を育てていくことなのだ。わたしたちは、そんな教育をしていかななくてはならない」「現代日本におけるエイズ教育の問題点としては、不特定多数の人との性行為に対して、倫理的な面やエイズに対する恐怖をあおることによってHIVへの感染を防ごうとする点にある。この方法ではHIV感染者への恐怖をあおるばかりでエイズに対する理解ある社会を構築することには程遠い」「患者は偏見や差別に常に耐えている。この偏見や差別をなくすた

めにも共感のもてるような教育をしなくてはならないと思う。ここで大切なのは共感と同情を区別することだ。同情は裏をかえせば差別にもなる」「エイズ教育に必要なかつ困難なのは、知識教育ではなく共感教育だと思います。共感と同情は違います」「エイズ教育と言う狭い枠の中だけでなく、同時に、社会の問題も考える社会教育につなげていけばいいのではないか」「どうしてこのようにエイズに対する関心が低くなってしまったのか？その理由はさきほど挙げたデータ教育にあると思う。このデータによるとこれはこうで、このデータによると…。しかしそれはただのデータに過ぎない。目には入るが心には入らない。事実であるが現実ではない。思うのだが事実である必要はないのではないか。実際自分が核を怖いものだと感じたのは、何月何日に原爆投下、何人死亡などという情報データではなく、はだしのゲンという原爆を基にした漫画を読んでであった。事実であるなしではなく心に染み入る何かが、エイズ教育には足りないのではないかと思う」「エイズという病気について、そんにな詳しく知る必要があるのだろうか。エイズ教育は、今のままでは、結局他の授業と同じで、聞いている人もまばらな、ただ単に義務で聞いているようになってしまおう。こころでエイズを受け入れられるようになる授業を期待したい」。

8. いつ頃からエイズ教育をすべきかについて

学生のレポートにエイズ教育をいつ頃から実施すべきか順序よくシステム化した教育など21件ほど意見があった。

「教育には順序がある。まず、子供にエイズの知識を与えることによって防ぐことができるようにする。防ぐためにはエイズの恐ろしさを教えなければ防ごうという意欲は起こらない。ところが、知識を教える一方で差別をなくそうとしている。恐ろしさを教えれば差別はなくならず、逆につくってしまう。その矛盾を教えるのであるから、よほど教育内容をシステム化しなければ教育効果はマイナスになる部分が非常に大きい。また教える側にもエイズについて多くの知識が必要である」「参考文献からエイズの感染直後に風邪のような症状が出ることがあると先生が話したら風邪の症状が出たときに不必要な心配をする小学生や普通の生活をしている人はエイズにかからないから大丈夫と先生が話したところ自分のお父さんは昼は家で寝ていて、夕方仕事に出ていき、朝帰ってくるという生活を送っているのでエイズにかかりやすいと思ってしまおうとい

う事例から小学生のような子どもたちに対してエイズに関する詳しくすぎる教育はかえって子どもたちの不安や誤解を招いてしまう結果となる」「エイズ教育を受けるのに適切な時期がある。それは学齢期である。その時期なら義務教育機関も含まれるので、みんなが大人になるまでにエイズに関する正しい知識を得られるからだ。もしその時期にエイズ教育を受けていなければ、エイズに関する正しい知識を得ることはできないし、エイズに対して誤解・偏見・差別を持ってしまいかねない」「性行為は、たいていの人ができることであって、それが盛んであるかないかは別として、性行為をした人を汚いと思う人はエイズに偏見を持つ人ほどはいないと思う。では差別の要因はというとうつらうつらということではないだろうか。うつらうつらということでは差別をするのはひどいと思って、性的な乱れにかこつけてその人を差別しようとしているのである。差別しないためには、小さい頃から簡単にはうつらない、うつらないと頭に叩き込んでおく必要があるだろう。日本のエイズ教育はもっと早期に行うべきだと思う。子供も、大人が思っているほど傷つくものではないと思う」。

9. 教える教師の自信のなさが目立つ

エイズ患者をみたことのない教師がエイズ教育をするわけだから生徒には自信なく教えているように映っているようである。

「私が初めてエイズ教育を受けたのは、中学校だった。ちょうどこの頃から、日本ではエイズを頻繁に取り上げるようになってきた。学校では、みんなにもっとエイズのことを知ってもらいたいと言うよりは、教育委員会で、教えないといけないと決められているから授業をしていたように思う」「私が中学・高校では、エイズについて授業でも何度か、取り上げられてきたが、先生も教えるにいらしく、さらっと流すような感じで、詳しくは教えてもらった経験が少ない」「教える側がはずかしいと思って説明をするようでは全く効果はないと思う。話す側がためらいをもって話していれば、その気持ちは話を聞く側に伝わるものであると思うからだ」「中学生だった私は体育の先生による保健体育の授業で、エイズについて学習した。しかし今思い出してみれば体育の先生自身エイズに関しては手探り状態で、とても生徒にきちんと理解させることが出来るほど研究していたとは思えないし、エイズ教育としてのキャリアも皆無に等しかったに違いない」「エイズ教育のプロフェッショナルを育成する研究機関が充実しなくてはならない」「新しい教育分野に戸

惑う教師も多いと思われるので的確な判断を指導できる専門教師の育成も今後の課題であろう」「現在、きちんとした知識を持って生徒達に教えられる教師が養成されていないことである。私が中学校の時、エイズについて教えられたときも、体育の教師が教科書に載っている解説を、当たり障りのないようにしか説明しなかったように思う」「あれから数年たった今、中学・高校のエイズ教育は変化しただろうか。今回の夏休みにを利用して地元の中学に行き伺ったところ私が受けたエイズ教育と比べると変わりのないエイズ教育が行われていることが分かった。そして更に、教える教師側も何をどう教えるべきなのか、何を一番強調すべきなのか、戸惑っているという現状も語ってくれた」「エイズの授業になると急に先生の口数が少なくなったり普段はにぎやかなクラスが静まりかえったりすることが私の学校ではあった。性の授業も男女が別々の教室に入って普段とは全く異なる雰囲気の中で行われたことを覚えている」「エイズ教育の目的は、感染拡大の防止(エイズの説明、検査のすすめ)、差別や偏見をなくすることである。しかし、このようなこと全てを、保健体育の教師に求めるのは無理である。また、限られた時間で、その上授業で扱わなければならないことは他にもある。私は中学生の時、学校で薬物乱用の恐ろしさについて、学校外から専門家を招いて、講義を受けてことがある。エイズ教育にも専門家が必要であると思う」「しかし、教師にとっては、自分達がエイズ教育を受けてきておらず、間違ったことや、自分達の勝手な思い込みも子供達に教えかねない。子供だけでなく、教師も一緒にエイズの正しい知識を学ぶ必要があると私は思う」「教師自身も、自分がエイズに感染する可能性はないと信じているし、エイズ教育に関しても文部省にそう決められたからといった義務感から、マニュアルどりの授業を展開し、よって生徒への説得力も薄れているのであろう」。

評価されている教師もいる。「中学校三年生になったとき、体育の先生が特別に3時間を使ってエイズの勉強をするといいだした。私は、また同じことをするのかと思って正直うんざりしていた。しかし始まった授業はこれまで受けていたものとは違っていた。事前アンケートから始まりSTDのこと、そしてある少女の体験記なども交えて私たちにわかりやすいように、でもきちんと正しいことを教えてくれた。アメリカでエイズと闘っている少年のことも話してくれたし、日本で自分がエイズであることを公開して差別をなくすよううったえる運動をしている人のビデオも見せてく

れた。文字のうえでの知識しかもっていなかった私にとってこれはかなりの衝撃だった。自分でもエイズにかかる可能性は十分にある。決して遠い世界の病気ではないと初めて感じる事ができた。先生は授業が終了したあとみんなに感想を書かせて事後アンケートをとった。そして授業で使ったプリントと事前・事後アンケートの結果、それからみんなの感想をすべてまとめて一冊の冊子にしたものを全員に配ってくれた。その冊子はいまでも大切にしまっている。

かならずしも専門家でなくても出来るノウハウの必要性を指摘したものもある。「教育の格差の問題もある。義務教育の場合は大体どこの学校のどの科目でも、同じレベルの授業を行っているはずである。それがエイズのこととなると様子が違うようである。学校あるいは先生により、授業のレベルが大きく違ってきているという現状があるらしいのだ。エイズ教育については、少数のベテラン教師が必要とされているわけではなく、新米の教師で指導できるノウハウが必要とされているのではないのだろうか」

10. エイズとの関係でおこなわれる性教育の難しさに関しては学生も痛感している。

「性教育の土台ができる前にエイズ教育が先行してしまったということである。私はエイズ教育というのは性教育がきちんと成された上で行われるべきものであると考える」「私が疑問に思ったことは、コンドーム教育がエイズ教育になるのかということである」「日本のエイズ教育は節制教育とコンドーム教育の狭間でとまどっているというのが現状である」「性交のしくみを教えない性教育の上にはHIV感染、エイズについての学習が成り立たない」「理科で受精卵の話があっても性交の教育は大人が扱いにくく（十分に）なされていない」「たいい学校で行われるエイズ教育は、性的行為による感染にばかり重点をおいている気がする。エイズは性的行為で感染します。だから不純異性交遊はやめなさいといつのまにか生活指導に変わっているのではないだろうか」「わたしは、私が受けてきたエイズ教育を決して良かったとは思っていない。今まで以上にエイズ教育を浸透させてゆくためには、性について、包み隠さず、明確に教えるところから始めなければならないと思っている」。

11. 大人へもエイズ教育を

大人のエイズ教育の必要性を指摘しているレポートが11件あった。エイズ教育を受けた生徒は基礎知識のない大人との間に大きな溝があることに気がついている。

「現在、中高年の人は十分な性教育は受けておらず、エイズについては学生より知識が少ない人もいるのではないか」「私たち若い世代だけでなく、親の世代にも、エイズ教育は必要だと思う。親の世代は今よりもエイズに対する正しい知識を持っている人はすくなかったらうし当然その子供にエイズの教育をしてあげられるわけがないと考えるからだ」「エイズ教育の場については、学校だけでなく家庭でも行われるのが理想である。しかし、実際のところ、家庭内で性教育が行われないという日本の現状から見ると、家庭でのエイズ教育はあまり期待できない。私自身も、エイズという病気を知ったのは学校で教わった時が初めてだったし、親とエイズについて話し合ったことは一度もない」「親と子がいっしょにエイズについて学ぶ機会を学校側が用意することも必要なのではないかと思う。例えば授業参観日や親子学級の時に親子で子供でもわかるレベルで学んだり、いっしょにHIV感染者が差別や偏見に立ち向かい、病気とも闘うような話のビデオなどを見たりする。こうしたことがきっかけで家でも家族でエイズについて話し合う機会が増えると思う」「親と子が性やエイズについて語り合えるようになれば良いと思う」「ただ、学校できちんとして教育を受けている子供よりも、その親である大人の中に差別意識が強いことの方が問題なのではないだろうか」「大人が正しい知識を持ち、差別や偏見を持たない社会をつくるべきだ。若者や子供は、その社会の中で育てば必然的にエイズ感染者との正しいコミュニケーションのとり方を覚えていくはずだ。私はそれば一番のエイズ教育だと思う」「教育というと上から下へ、先生から生徒、学校の授業といったイメージがある。しかし、エイズに関しては誰もかれもが学ばなければいけない状態に見える。自分の親だって、先生だって、エイズなんてあまり気にせずくらしているだろう。エイズについては、大人も子供もいっしょになって考えて、学ばなければならない」。

エイズに関しても生涯教育の必要性を指摘している。「私は、エイズ教育というのは、教育機関である学校や大学だけでなく、社会全体で担ってゆくべきだと思う。そして、何よりも私たち一人一人が性に関してしっかりして意識を持って、自らを傷つけるような行為を

しないようにすることが一番大切なのではないだろうか」「若い世代が相当な知識を持っているのに対し、親世代の人々の知識が若い世代より少ないことである。親世代の人々はエイズ教育を受けていないためだと思われるので、学校教育だけでなく職場・地域でも教育が行われる必要がある」「子供達にエイズ教育を施す義務を学校だけに押しつけるつもりは無い。まずは家庭で、親が子に教えるべきなのは言うまでもない。しかし幸い日本では、せっき学校で高水準の教育をしているのだから、その内容をさらに実用的で充実してほしい」。

12. マスコミとエイズ教育について

エイズ教育に及ぼすマスコミの影響について29件あった。その中には今回のレポートはマスコミ関連は薬害エイズの報道が減少し世間のエイズに関する関心が減ったという意見があった。事実薬害エイズに関するレポートは平成8年度に比較して減少している。

「今回レポートを書くにあたって資料を探している感じのだが、エイズについての資料は意外に少ないのだ。書店に至っては、癌などについての本やエッセイは多くあったが店を4軒まわって、エイズ関連の本は2冊しか置いていなくて、後は取り寄せという形だった。このことだけでなく、新聞やテレビなどのニュースでのエイズに対する取り扱いは、ほかの病気とは少し違う様に思う」「ある時期エイズについてとりざされて国民はもうエイズについて分かったと安心してしまったのではないかと思います」「エイズが以前ほど報道されずに、人々がエイズの存在が注目されなくなった今こそ、エイズ教育を着実に広範囲に積極的に行う必要がある」。

今回のレポートでは1998年7月から9月にかけて放映されたテレビドラマ「神様、もう少しだけ」²⁾は見た人が多くそれを取りあげたレポートが多かった。そしてその評価は分れた。「今までに聞いたことはあるが詳しくはしらなかったといった若い世代の人達に、エイズを知るきっかけを与えたのが一つのトレンドドラマだったというのはいかにも現代的であるように思う」という受け止め方がある。

テレビドラマを評価しない意見としては、「私にはこれはマスコミの視聴率upのための多くは興味本位によるもので教育とはほど遠いものに思われる。実際に、私たち視聴者側も人気番組だし、おもしろいから見るけどどうしても自分には関係のないまさか起るわけもない話だととらえてしまう」「人気俳優の人気

が高まれば高まる程、親近感は弱まり自分とは縁遠い世界に感じてしまう。AIDSも別世界のこととして把握されてしまう。ものすごい数の爆撃の生の映像を見ていながらTVゲームのシュミレーションと混同してしまうことが話題になった、あの湾岸戦争の時のようだ」。

女子高校生の援助交際にふれ「テレビの影響力というのはすさまじいものだと思いつつ、こういう人達がエイズを広めているのかと思うんざりした」「しかし私が何より嫌いだったのは援助交際していてエイズに感染した女子高生がヒロインつまり視聴者側で善の立場におかれたことである。私はこんなヒロインに共感できない。エイズになっていい気味だとさえ思った」「最近テレビや映画でエイズを取り扱ったものをよく見るようになった。たいてい最後は感動的な内容である。こういったドラマなどを見ることで、エイズというものを美化（何か感動的のもの）したり、映像の世界のこととしてとらえる人がでてこないか少々心配である。話が感動的であればあるほど現実とのギャップを思い知らされる」。

評価する意見としては「あのドラマの中の話は現実にも起こっているかもしれない。エイズをもって身近なものとして受けとめるために、今私たちにできること、それから学ぶべきなのではないだろうか。それが私の考えるエイズ教育である」「私は噂が流れ、TVで話題が上がるようになってから、学校で話を受けたという体験をした。学校はとにかく遅い。情報の発信から、伝達するまでが非常に長すぎる。だからTVなどで知識を増やすのは良いことだと思う」「神様...を観たことによってこういう手続きでエイズ検査をするんだとかエイズへの社会の目などが女子高校生たちにも分かったのではないだろうか。そしてこれもエイズ教育の一つではないだろうか」「ドラマをはじめとして、いろいろメディアを通してどうしたら感染してしまうか、そして普通の生活をしている分には何も問題はないということを知ることができる。これらの点では日本はエイズ教育先進国の一員になっていると感じる」「今回はドラマという形で、エイズに関して興味をもつきっかけをたくさんつくることが出来た。そこから、興味をもった人々がエイズに対しての正しい知識をもち、そのことをふまえた上での行動こそが、今のこの現状を変えることができるであろう」「学校教育で早い時期から性教育やエイズ教育を行なうのはもちろん大事なことであると思う。それを大前提としてであるが、テレビドラマは、人々が、よりエイズを

身近な病気として受け入れることを可能にすると私は考える」「学校の教材で使用するビデオは内容がまじめすぎて面白くない。そこでこのようにドラマ仕立てにしてみるのはどうだろうか。自分と同じ年齢の主人公だから、共感しやすくまたエイズに対しての価値観が変わってくるのではないだろうか、たまたま自分が彼女のようになってしまったらと患者の立場になって考えることができるようになるかもしれない」「今、テレビドラマでAIDSをテーマにした神様、もうすこしだけ・・・という番組が放送されている。その影響でエイズの検査を受ける若者が急激に増えているらしい。現代の若者には、学校の教科書で学ぶよりも人気俳優の出ているテレビ番組を見るほうが、よほど効果があると思う。それも正しい知識とは言えないが、教科書でAIDSは翻訳すると後天性免疫不全症候群というところ習うよりもなんらかの影響があるだろう」。

マスコミの影響下でエイズ教育を受けてきた世代として以下のような文章もある。

「ドラマや映画などで取り上げるというのは影響力があるからいい反面間違った知識が広まってしまうかもしれない、という危険性があるから、試作側の知識も重要だと思うし、作る人はその点を気をつけてもらいたいと思う」「私が本格的にエイズ教育を受けたのは高校に入ってからのように思う。ちょうどその当時、川田龍平さんのHIV訴訟や、アメリカのバスケットボール選手のマジック・ジョンソンさんのエイズ告白など、日本だけでなく国際的にエイズ問題がクローズアップされていた。そういったことが重なって、エイズ講演会があらゆる所で行われ、また、保健の授業等でも大きく取り上げられた。いわばブームに乗ったかたちで、エイズ教育が活発化していたように感じられる。だが、それ以降はやや下火になっている気がする。最近も、エイズに感ずるテレビドラマが話題となり、エイズ検査をする人々が増えているようであるが、これも一時的なものにすぎないのかもしれない」。

13. エイズ自業自得論に対して

今回もエイズの自業自得論について触れたレポートは14件ほどあった。まだ自業自得論が充分克服出来ているとはいえない。

「様々な報道を見るうちに私には、エイズはホモの病気という知識が刷り込まれていった。顔を写さず、すりガラス越しから、差別を訴えるホモの人々、エイズの人々を見ても、同情する事もなく自業自得だという大人の言葉どうりだと感じていた」「肺がんにかかっ

た人とエイズにかかった人。同じエイズでも感染の仕方が異なる人。病の種類、かかった状況で人の態度は変わってしまう。そこには偏見というものが存在する。私にも偏見がある。売春でエイズウイルスに感染した人に対して表面的な部分では、どんな人も差別の対象になることがあってはならないし、その人権は守られなくてはならない、と言える。しかし根っこの部分では自業自得だ、とってしまう」「あとで、東南アジアなどは売春目的で旅行に行ってエイズに感染する人もいるということを知ってとても驚いた。病気自体は差別しないけれど、このような理由でエイズに感染したということを知ったら、やっぱり軽蔑してしまうかもしれないなと思った」。

一方エイズ自業自得論についてしっかりした意見も述べられている。

「エイズに感染したと公表するという事は、同時に自分が良くないとされる行為をしたというプライベートな部分をさらすことになるのだ。そうした感染は自業自得と言えなくない。しかし人間に過ちはつきものである。死に至る病気にかかり、本人は誰にも言われなくとも十分に後悔をし、絶望しているに違いない。そのことを十分に考慮して、感染者を暖かく見守る気持を育てることも大切だと思う」「自分に非がない場合にエイズに感染することもあるし、たとえ自分の行為のせいだったとしても、死を見つめて生きることにはつらいに決まっている。一生懸命自分の人生を生きようとしている人たちに、嫌な思いをさせて住みにくい環境を強いるのは、生きる権利をすでに奪うことになると思う。こういったこともきちんと伝えられるエイズ教育であってほしい」「愛知高校生フェスティバル実行委員会という組織があり、ある年にイベントの一企画としてエイズが取り上げられた。企画会議の中では、特に薬害感染によるエイズは同情的に見られ、大きく取り上げられたのに対し、性行為による感染の場合は取り上げられなかった。ここには目に見えない偏見がある。同じエイズ患者でも同情の余地がある場合と自業自得だと差別をされる場合があるのだ。これは偏見をなくすための正しいエイズ教育がなされてこなかった結果であると思う」「まだ数としては多いとはいえないが、自分がエイズであることを告白し、エイズの真実を教えようとして積極的に活動している人もいる。自分がエイズでありながら、エイズと闘い、またエイズをくい止めようと懸命になっている人たちの行動を私たちは決して見過ごしてはならない。それこそ真のエイズ教育であるといえるのだ」「私の中

学校では年一回人権講話が行われていたが、一年と二年の時はエイズについてだった。また家庭科の時間と人権講話の内容について注目すべき点は輸血や医療事故、母子感染以外の経路から感染した人達、一般に自業自得とみられがちの人々がとりあげられた。エイズには、ハンセン氏病の偏見とはちがった側面を持っている。それは感染経路が性行為や麻薬の回し打ちなどの場合は自業自得として世間は感染者に対して冷たい。しかし世界的に様々な人のありかたが認められるにしたがって、性行為によって感染した人もその人権を守れるべきだという考え方が出てきており、その考えはエイズ教育の中に盛り込まれつつある」。

14. 留学経験

少数だが（2件）留学経験で学んだエイズ教育について触れるレポートがあった。エイズ教育だけでなく日本との授業形態の違いが指摘されている。

「アメリカへ留学をして大学内にもホモセクシュアルやレズビアンサークルのポスターが堂々と貼られているなど性が公共の場に氾濫している。日本のエイズ教育でもっと性を正面からとらえて性行為感染を説明すること、患者の人権問題を取り入れること、そして学校以外における住民たちのエイズ学習の支援をつくる必要があると考えられた。こうした教育は、従来の受験勉強用の詰め込み教育は決して出てこないものである」「交換留学で通ったオーストラリアの学校では、かなりダイレクトに、しかも、生徒と教師の間で対等に激しい討論がなされていて、私は驚きの色を隠せなかった。ホストシスターの話では、一ヶ月に一回ほど生徒達がテーマを決めて調査し、エイズ以外にもドラッグやピルなど様々な問題を取り上げるのだそうだ。一般論として、他国と比べ日本の生徒や授業形態は受け身で消極的だとよく言われるがエイズ教育という点でも、それは共通しているように私には思われた」。

15. エイズ教育と国際性

日本のエイズ教育では他の国のエイズについて十分に教えてはいないようである。レポートでは他の国のエイズについては簡単にしか触れられていない。

「私は、幸いにして日本に生まれた。だからエイズ教育を受けることができる。日本にいれば、優秀な医師に診てもらうこともできる。良い治療を受けることもできるだろう。しかし、日本のような国ばかりがあるわけではない」「エイズは世界規模でも深刻な問題

であるので、日本だけにとどまらず、発展途上国をはじめ、エイズ感染者が増加し続けている国々では、エイズ教育はさらに積極的に行われるべきである」「エイズ教育については他にも発展途上国などでエイズ教育はおろか、普通の教育すら受けられない状態で、予防できないなどという深刻な問題もある。私達が本当の意味で予防と偏見をなくそうと考えているのならばそれらの国々についても考え、目を向け、助け合わねばならない。そのような思いやりもエイズ教育の一環として大切なことではないだろうか。私達は、今一度エイズ教育についてしっかりと見つめ直し、エイズを世界的な問題として捉え、改善の努力をしていかなければならないと私は考える」「エイズはアフリカの一地方に起こり、様々な条件のもと、世界中に広まったといわれている。このように、一地方の出来事が全世界に大きな影響を与えた。それは、もはや世界が各地方と直結していることを意味しているのだと思う。遠いどこかの国のことも無関心ではいられないということも子供たちが学んでいくのではないだろうか」。

考 案

今回の大学生のレポートから見られる範囲で現在おこなわれている小中高校のエイズ教育を考え、さらに大学におけるエイズ教育について触れる。今回は「エイズ教育について私はこう考える」というテーマで自由にレポートを書いてもらっているのでアンケートとは違い、最近の学生のエイズに関する意識を量的に正確に分析する事は難しい。しかしながら以下のような事は言える。

今の大学生は中学校・高校で、保健体育の授業を主にエイズ教育を受けてきており、エイズとはどのような病気での予防にはどうすればよいのかといった基礎的な知識は身につけていることが分かる。これは昭和62年のエイズ問題総合対策大綱を受けて昭和62年2月、文部省のエイズ予防についての体育局通知があり、さらにそれ以降の文部省の対応が大きく、私が10年前に愛知県立大学の保健体育の授業でエイズ教育を取り上げた時と比較し学生の理解度は雲泥の差がある。³⁾ それでもまだエイズ教育としては不十分で、エイズを教えている教師は生徒には自信なげにおしえている印象を与えているようである。またエイズが治療法のない怖い病気であると教えられておりそれがよけいエイズの患者の差別、偏見に結びつくと生徒は感じている。また現在のエイズがSTDであり、性教育が不十分なままエイズ教育が行われることに割り切れないものを感じているようである。さらに家庭ではエイズとは縁の遠いと考えている親と共通の話

題にすることが出来ない。したがって大人にもエイズ教育をという意見が出てくる。

しかし日本ではエイズの患者はアメリカ合衆国、東南アジア、アフリカと比較し患者数は少なく、医療機関ですらエイズ指定病院以外は日常的に遭遇することは少ない。⁴⁾したがってエイズについては知識だけで行う授業であり、自信をもって身近な問題として授業をすることは難しい。またエイズそのものが1980年代以後出てきた新しい感染症で、一般の大人にとっても親子でエイズについて話すことは難しい。しかし、エイズという病気があり、現在はSTDの予防と血液の扱いに注意すれば簡単にうつる病気ではないことを知っているだけでもまったく無防備の状態よりよほどよい。過去の学校教育で一つの感染症が集中的に取り上げられたことがあったらうか。すくなくとも日本ではエイズ患者が短期間に爆発的に増加するのを防ぎ得たのは中高校でのエイズ教育が一定の役目を果たしてきていると思う。このことは今後の保健体育の授業にいくつかの課題を提起している。エイズ教育による実績は他の疾患、とりわけ日本に多いアレルギーや成人病（生活習慣病）の予防や治療に保健体育の授業が十分に貢献出来ることを示している。またハンセン病や精神疾患など、ともすると差別・偏見で見られる疾患の人々との共存について若い時から教えていく事が出来る。ただこの問題は現在の学校保健が半病気や半健康な子供達への対応に追われ、また養護教員は不登校の生徒への対応も期待され余裕のない状況で性教育との関係でエイズを取り上げなければならない難しさをもっている。⁵⁾

また学生のレポートに見られる疾病の怖さを教えることでエイズ患者の差別に結びつくという指摘は逆の読み方をすれば、偏見とか差別という言葉がたびたび学生のレポートに出ており今の大学生に人権意識が十分に定着してきたことを示している。今の大学生がエイズという問題を通じて疾病の予防の知識だけでなく、病気にかかった人を思いやる心を持ち、自然に社会の差別、偏見という言葉がでているのは心強い。また大学生がともするとエイズを他人事として考えてしまう、そのことの危険性を自分で自覚している学生が多く、自分の身近な問題としてエイズに取り組むにはどうすればいいのか考え続けている。またすでに多くの小中高校でのエイズ教育についてのすぐれた実践経験が積み重ねられてきておりこれがさらに広がればエイズという感染症を通じて人間教育に広がり示すことになる。^{6) 7) 8)}

またエイズ教育を受けていない親、大人とはエイズや性の問題を語ることは出来ず大人へエイズ教育をという

指摘はもっともな指摘で、エイズ教育は教育機関だけの問題でなく、企業や地域も含めた生涯教育の一環を担うものになりつつあると思う。

以上の状況から大学の教養課程におけるエイズ教育はどのような事を教える必要があるのだろうか。

エイズに関する基礎知識は一応身に付いていても忘れていたり、あいまいな部分は復習をしておく必要がある。しかし大学生であり義務教育・高校での授業で基礎知識を持ってきているので重複を避け、むしろウイルスと細胞の親和性とは何か、HIVは何故免疫細胞のように重要な細胞に親和性を持つことになったのか、HIVのoriginはどのように考えられ立証されてきたのか、長期間未発症者とそうでない人がどう違うのか、HIVは何故レトロウイルスといわれるのか、逆転写酵素の役目などといったウイルス学の一部をわかりやすく紹介すれば十分関心をもってもらえる。

学生のレポートにみられる一番大きい問題はエイズが不治の病で治療法がないと教えられていることである。今の大学生が中学校の時はそうであったかもしれない。しかし現在のエイズはすでに慢性疾患で複数の逆転写酵素阻害剤やプロテアーゼ阻害剤の併用療法によってエイズの発病を長期に予防可能になってきている。¹⁾

このことを十分に話しておかないと、どうせ直らない病気なら検査を受けに行く気にならない。レポートを書くために春日井市保健所にエイズの検査にいった経験を学生がエイズの検査を受ける人が減少していると書いてきている。

また中高校のエイズ教育がどうしてもエイズにかからないにはという発想で、健常者の立場で行われる教育で、HIV感染者の立場での教育が不十分である。その視点をエイズ教育に取り入れるとすれば当然、新薬に間する情報や、医療費の問題、HIV感染者の抱える問題、学校や職場でプライバシーの守り方や人権の問題など多く語るべきことがある。これはすべて学校教育に押しつけてしまうのではなく卒業後も生涯教育として教育プログラムが予定されるべきである。

今年のレポートには薬害エイズに関する記載が極端に減少してしまった。マスコミ報道が減少したことと関係すると思うが、日本のエイズの特徴は薬害エイズが多いことであり、それには官庁・製薬業界・医学会の癒着など構造的な問題があり、教え続けなければならない問題である。ただ薬害の問題はエイズ以外にも過去にも多数あり、保健体育・健康科学授業としては「薬害」としてくすりとのつき合い方を別に教える必要を感じている。

医学的な話題以外に学生に話しておきたいのはアメリ

カ合衆国におけるエイズである。アメリカ合衆国ではエイズ対策に最初遅れをとり多数のエイズ患者を出してしまった。²

しかし現在膨大なエイズ対策予算を出しエイズ研究を推進しているのもアメリカ合衆国である。エイズを通じてみるアメリカ社会を上手に話すことが出来ればいいと思っている。同時に東南アジア、アフリカのサハラ以南の国の衛生状態など深刻な問題をもっており、大学の教養科目という特徴を生かして外国の地域研究を行っている先生方と交流し、その経験や知識を生かすための準備をすすめたい。

以上のように学生のレポートは現在の日本におけるエイズ教育の到達点や問題点を的確に指摘しており保健体育・健康科学の授業をすすめる際に参考になった。エイズに関するマスコミ関係の報道は減っているが、東南アジア、アフリカではエイズ患者は激増しており、国際化の進む日本も例外ではあり得ない。エイズ教育をさらに充実することにより学生にエイズに関する最近の正しい知識とともに人権問題、国際的視点など新しい視点を持って欲しいと思っている。

- 1 現在のエイズ治療はCD4とHIV RNA量を目安に2剤の逆転写酵素阻害剤と1剤のプロテアーゼ阻害剤の3剤併用療法が基本である。以前に比較しエイズの治療は格段の進歩と言える。しかし薬物耐性の問題、長期の多剤併用による副作用、医療費の問題などの未解決の課題は多い。
- 2 1997年12月までに、CDCには390,692人のエイズ例の死亡が報告されている。(Centers for Diseases Control and Prevention. HIV/AIDS Surveillance Report 1997;9: 1-44)

略 語

AIDS: Acquired Immunodeficiency Syndrome
後天性免疫不全症候群

HIV: Human Immunodeficiency Virus
エイズウイルス

STD: Sexual Transmitted Disease
性行為感染症

参考文献

- 1) 「エイズレポートー文科系大学でエイズ教育をしてみてもー」愛知県立大学 児童教育学科論集 第30号 1997年
- 2) 「神様、もう少しだけ」浅野妙子 角川書店 1998年
注: テレビドラマ「神様、もう少しだけ」のシナリオをもとに小説化したもの。
- 3) 「エイズ教育をこう考える」文部省体育局学校健康教育課 石川哲也 Vol41 No.3 体育科教育93・2別冊
ーエイズと教育 大修館書店 1993年
- 4) エイズー教職員のためのガイドブックー '98 国立大学保

健管理施設協議会エイズ特別委員会

注: 大学の教職員向けの本で、最近の治療法とともに諸外国のエイズ教育やエイズ事情が集められており中学・高校の教師にも役立つガイドブックである。

- 5) 「教育保健学への構図」数見隆生 大修館書店 1994年
注: 教育としての学校保健という視点で書かれており保健の「学力形成が要求されている時代」など医療関係者にも参考になる点が多い。
- 6) 「エイズー最近の動向」日本医事新報 No.3892 1998年
注: 岡山大学では武田淳氏の手記「打ち明けてくれてありがとう」を積極的に読ませて、エイズを身近に感じさせる工夫をしている。
- 7) エイズと教育2 Vol.45 No.8 大修館書店 1997年
注: 松山市立味酒小学校、根室市立和田中学校、広島県豊松村立豊松中学校、北海道厚岸潮見高等学校、福井県立大野東高等学校、愛媛県立宇和高等学校などの実践経験はエイズを身近に感じさせる工夫、STDを教えることの難しさなど教育現場の状況がよくわかる。
- 8) 性と生の教育 No.7 あゆみ出版 1996年
注: “人間と性” 教育研究協議会が企画・編集している。よいエイズ・わるいエイズ、分離主義こそがエイズへの真の敵、エイズは教えるのではなくエイズに学ぶことの重要性など印象に残る言葉が多く使われていた。

謝 意

名古屋市、瀬戸市、尾張旭市の小中学校の記載は当大学のドイツ学科の岩瀬喜美子さんの取材によるものである。またご指導いただいた愛知県立大学文学部児童教育学科丸山真司先生に感謝します。

AIDS Education at Aichi Prefectural University

SHIMIZU Kiyoshi

Department of Social Welfare, Faculty of Literature, Aichi Prefectural University

The aim of this paper is to analyze how the university students think AIDS (Acquired Immunodeficiency Syndrome) education in Japan.

I obtained 207 papers written by the university students on the theme of "what do you think of AIDS education in Japan?".

The results suggested ;

- 1) The university students obtained the basic knowledge on AIDS through the AIDS education which was held in their junior/senior high school days.
- 2) However, they do not know much about recent medical treatment for AIDS.
- 3) The students state in their papers that AIDS education for adults is necessary in Japan.
- 4) They also receive a lot of information on AIDS from mass media such as TV program.

These results seem to suggest that AIDS education at junior high schools and senior high schools in Japan are effective in preventing AIDS infections among the younger generation.